

南河内の河内木綿

——「河内木綿と寺内町展」の成果として——

中 道 厚 子

はじめに

2018年8月25日から9月2日まで、大阪の南、近鉄富田林駅前にある観光交流施設きらめきファクトリー（以下きらめきファクトリーと略す）で「河内木綿と寺内町展」が開催された。この展示は、大阪大谷大学人間社会学部の学生が実際に社会に出て様々な機関で学ばせていただく授業科目の一環であった。4月から担当教員ときらめきファクトリー館長の指導の元、学生達は「河内木綿と寺内町展」の実施に向けた準備を開始した。筆者は、2010年に公開講座「地域

図1 平成22年度
(2010年度)
公開講座ちらし



平成22年度 大阪大谷大学公開講座（人間社会学部）

地域もののづくり再発見

—河内木綿の可能性について—



日 時：10月2日（土）13:00～16:00
場 所：大阪大谷大学 博物館301・302教室
内 容：第一節 ワークショップ
綿織みから綿織りまでを体験していただきます。河内木綿とは何か、どんな魅力があるのか、体験してください。
講 師：李 照達伊氏
（八尾市立歴史民俗資料館学芸員）
申 込：ワークショップには定員があります（30名）。【※申込先着順・9/17締切】シンポジウムの参加は申込不要。
内 容：第二節 シンポジウム
本講座を活用した地域活動の実例報告
—平野区の小学校への出張授業、昭和街での企業との協力など—および、河内木綿の歴史の解説のあと、話し合いを行います。
シンポジスト：
李 照達伊氏（八尾市立歴史民俗資料館学芸員）
木村 元廣氏（『きしわたの会』事務局長）
西田 博司氏（『平野区わたの会』前代表）
橋本 千栄子氏（大谷女子短期大学=名誉教授）
共 催：（財）八尾市文化財調査研究会
主 催：大阪大谷大学
人間社会学部
富田林市錦織北3-11-1
TEL：0721-24-0381（代）
FAX：0721-24-1515（公開講座参加受付）

図2 平成30年度
(2018年度)
富田林市きらめきファクトリーちらし

ものづくり再発見 河内木綿の可能性について」を担当した経験から、ボランティアとしてこの取り組みに参加した。

生涯教育学を専門とする筆者は、これからの生涯学習社会においては、様々な学びを点で終わらせるだけでなく、線をつなぎ循環させる必要があると考える。今回の参加は、点的限界を乗り越えるため、公的施設と大学との連携で、学生の学びがどう実現し、その成果として市民に学びがどう提供されるかを学ばせてもらう貴重な機会ともなった。また、情報を発信する難しさや富田林市の文化財課や図書館との連携の重要性も実感できた。

本論は、この「河内木綿と寺内町展」開催をめざし、きらめきファクトリー館長・教員・学生と共に企画・準備・実施を通して学び収集した成果を点で終わらせないため、さらに情報収集を重ねた結果をまとめた。

1. わが国における木綿の歴史－輸入綿

わが国への木綿の伝来については、諸説ある。河内木綿研究の先駆者武部善人はその著書『河内木綿史』の中で、『工芸作物学』、『中河内郡誌』、『布施町史』、『農業全書』、『綿圃要務』、『柏原町史』の内容を紹介した上で、わが国の木綿栽培を4期に分け、その第1期（起源・導入期）を「延暦18年（799）ころから、延暦の終わり（921）ころに至る120年間」⁽¹⁾としている。武部があげた延暦18年（799）に関する記述は平安時代に編纂された『類聚国史』にあり、799年に蛮船が三河に漂着し綿の種を伝え、翌年には朝廷が紀伊などに植えさせたが、途絶えたことが記されている⁽²⁾。

綿の栽培には失敗したが、木綿そのものは大陸からわが国に輸入される。松尾量子は論文「木綿織物の受容過程と柳井縞に関する一考察」で、「鎌倉時代には、日本から中国への禅僧の留学や中国からの高僧の渡航によって、中国の高度な技術に基づく染織品が、袈裟などの形をとってもたらされているので、木綿についても、仏教寺院においては、比較的早くから知られていたと考えられる。」とし、南北朝後期から室町初期の作と推定される往来物『庭訓往来』に「木綿の肚脱」の記述があることを指摘、肚脱が禅僧のかぶる袋であることを説明している⁽³⁾。

朝鮮半島では、中国国内からの持ち出しが禁止されていた綿の種を、1364年に高麗の文益漸が機織りの道具と共に隋から持ち出し、100年もたたない間に高麗に綿づくりが広まった。室町時代の僧瑞溪周鳳によって文明2（1470）年ごろ記された外交史『善隣国宝記（巻中）』には、応永13年（1406）將軍足利義満が朝鮮国王に送った使節達に、国王から贈られた名産品の中に「青木綿、紅紬、肉紅紬、綿子、苧麻布」などの記述が見られる⁽⁴⁾。小野晃嗣は著書『日本産業発達史の研究』の「本邦木綿機業成立の過程」で、この時代の日朝貿易の変化を詳しく取り上げている。当初は、外交儀礼品の1つにすぎなかった木綿が、やがて綿布を中心に日本から大量に要求されるようになり、「これは李朝にとって看過を許さざる重大な財政的問題となった。我国人が朝鮮に齎すところの銅・黄金・蘇木等は、貴族の奢侈或は趣味生活にあつては、必要なる

ものではあったが、一般庶民の経済生活には、必ずしも、緊要不可欠の物資ではなかった。彼等のいわゆる「無用之長物」をもって綿布のような有用の資材を多量に海外に流出せしむることは、社会生活の上にまた重要な問題を投げかけたのであった。故に李朝は綿布流出に対して制限を加うるに至ったのである。」としている⁽⁵⁾。当時、非常に貴重であった木綿は、麻や絹よりも防寒性や耐久性に優れており、兵士の衣服や船の帆などの広がるニーズから、わが国にとってどうしても手に入れたいものの1つであった。その為、入手先は朝鮮半島から中国へと移行する。

応仁の乱前後の社会状況を詳しく伝える興福寺大乘院の門主3代の日記『大乘院寺社雑事記』の応仁2年(1468年)10月19日⁽⁶⁾には、当時、警察のような役割を果たしていた興福寺の僧衆の、傘下の市座衆のうち、布座と小物座の木綿の販売権争いへの対応が記されている。この争いで、小物座が「唐物」として、布座が「衣服」の素材として、それぞれ木綿の販売権を主張している状況から、中国から輸入された唐物の木綿が、庶民対象の市で取り扱われ、衣服としても浸透している様子がうかがえる。

2. わが国における木綿の歴史－国産綿

「1」の冒頭で述べたように、延暦18年(799)の綿種の伝来時には、その栽培に失敗したが、1400年代後半頃には、綿の種が伝わり各地で綿栽培が行われていた可能性があることがいくつかの文献からわかる。

武部善人は『河内木綿史』で、『布施町史』の「木綿の伝来は何時頃に始まったかといふと延暦年中であったと思はれる(中略)応仁(1467-69)の頃か、畠山氏の一族河内洪川郡久宝寺の城主九郎光貞、將軍の命を奉じ明に渡航したる時、木綿の種を得て齋し帰り、之を領地の人民に播種栽培せしめたといふことである。惜しい事に乱世であつたから、世に拡がらずして絶えたのではないかと想像される。徳川の初世頃には多少栽培せられたかと思はれる。」を紹介している⁽⁷⁾。

永原慶二は『新・木綿以前のこと』の中で、わが国の木綿の初出として、『金剛三昧院文書』中の文明11年(1479年)の「筑前国粥田荘 納所等連署料足注文」にある「木綿壺端令賢房へ進之」の記述を、筑前国粥田荘で栽培された木綿として、多少の不安が残るとしながらあげている⁽⁸⁾。

小野見嗣は前述の著書で、上杉房定が毛利重広に宛てた明応3年(1494年)9月16日の「安堵状」と続く、同年9月20日の「制札」に「ミわた(實綿)」の記述があることを紹介している⁽⁹⁾。最古の国産綿の記述としてこの「安堵状」をあげている文献や情報があるが、正確には「安堵状」ではなく「制札」であり、「制札」の中で作物としての実綿に税がかけられていることが重要である。

江戸時代後期に農業に関する多くの著書をもって農民の暮らしの改善に腐心した大蔵永常が著した綿花栽培の技術書『綿圃要務』には、「天文・文禄の頃又種子渡り来りて、五畿内邊に作り

弘めたるを元禄年中筑前の国宮崎安貞といふ人、領主より厚く恩恵をうけて諸国を経廻り、広く萬木萬草の作り方を老農に詢いて書をあらはし、其中に此の綿の事を委く記せり。是農業全書なり。」とし、1500年代に本格的な綿の栽培が広がったことを伝えている⁽¹⁰⁾。

3. 河内における木綿の歴史

全国的な綿栽培の広がりにつき、この項では河内における木綿の状況に視点を移したい。

河内は大阪の東南部を占め、淀川よりも都に近いことから河の内側の地として、河内（古くは川内）と呼ばれた。畿内五国（山城・大和、河内、摂津、和泉）の1つとして人口も多く、渡来人も住んだ。河内国に所属する郡は、奈良時代には錦部、石川、古市、安宿部、堅下、堅上、高安、河内、讃良、茨田、交野、若江、渋川、志紀、丹比、大鳥、和泉、日根の18郡であったが、鎌倉時代以降、錦部、石川、古市、安宿部、高安、河内、讃良、茨田、交野、若江、渋川、志紀、丹南、丹北、八上、大鳥の16郡となった。現在の大阪府の行政区画では、この河内エリアを北・中・南に分けて、北河内地域を枚方市、交野市、寝屋川市、守口市、門真市、四條畷市、大東市の7市。中河内地域を、東大阪市、八尾市、柏原市の3市。南河内地域を、松原市、羽曳野市、藤井寺市、太子町、河南町、千早赤阪村、富田林市、大阪狭山市、河内長野市の6市2町1村としている。

「河内木綿」は、この河内の地で栽培され織られた木綿をさす。武部善人は『河内木綿史』の序の冒頭で、「本書で言う「河内木綿」とは、厳密には大永・享禄以降、主に近世・明治を経て、さらに大正四・五年におよぶ、およそ四〇〇年にわたり大坂（大阪）河内地方の農家において広く栽培された草綿（在来綿）から取れた綿毛を原料として、手紡・手織された糸太・地厚の綿布のことである。」⁽¹¹⁾としている。さらに、武部は大永・享禄（1521年－1532年）の根拠として、『柏原町史』の「河内に綿の栽培されたのは、今より四百年前の大永・享禄年間と推察される。慶長（一五九六～一六一五）の頃には盛んに良品を出し、既に三宅村方面の三宅木綿は有名であった」の記述を紹介している⁽¹²⁾。

古書にあらわれる河内木綿を年代順に追うと、松江重頼が正保2年（1645年）刊行した俳諧書『毛吹草』巻4では全国の名産・名物を紹介する中、「河内」の項に天野酒・平野鮎などと共に「久宝寺木綿」があがっている⁽¹³⁾。また、元禄2年（1689年）に



図3 河内国郡図

出典：『大阪府史第5巻 近世編Ⅰ』大阪府、1986年、P.314

表1 河内国の郡名と現在の市町村

河内国の郡名

奈良時代	錦部	石川	古市	丹比			志紀	渋川	若江	安宿部	高安	河内	堅下	堅上	讃良	茨田	交野
鎌倉時代	錦部	石川	古市	丹北	丹南	八上	志紀	渋川	若江	安宿部	高安	河内	大県		讃良	茨田	交野
江戸時代	錦部	石川	古市	丹北	丹南	八上	志紀	渋川	若江	安宿部	高安	河内	大県		讃良	茨田	交野
現在の 行政区画 (全域は ゴシック)	河内長野市	南河内郡	羽曳野市	松原市	大阪狭山市	堺市	藤井寺	八尾市	八尾市	柏原市	八尾市	東大阪市	柏原市		四條畷市	守口市	交野市
	富田林市	(太子町、 河南町、 千早赤阪村)		大阪市	堺市	松原市	八尾市	大阪市	東大阪市			八尾市	八尾市		大東市	門真市	枚方市
				八尾市	松原市		柏原市	東大阪市							寝屋川市	大阪市	寝屋川市
		富田林市		羽曳野市	羽曳野市											枚方市	
				藤井寺市	藤井寺市											寝屋川市	
																大東市	
	南河内							中河内							北河内		

参考：『市町村名変遷辞典』地名情報資料室、1990、東京堂出版

『養生訓』で知られる貝原益軒が刊行した『南遊紀行』の下巻には、「國府の北の山下の村々をすべて、山の根と云。(中略)凡河内國は木綿を多くうふ。山の根の邊殊におほし。畠持ちたる者は餘の物を作らず、悉くきわたをうふると云。此邊もめんをおほく織いだす。山根木綿とて京都の人は人を良(よし)とす。」と記されている。短い文であるが、河内国で木綿栽培がさかんであったこと。特に国府地域では、畑にはすべて綿を植え、山根木綿がブランドとして京都の人々に好まれていたことがわかる⁽¹⁴⁾。「2」で大蔵永常が紹介した宮崎安貞が元禄10年(1697年)に刊行した『農業全書』巻6には、「三 草之類」の冒頭に「木綿」の項がおかれ、綿の種が100年以上前にわが国に伝えられ、特に河内、和泉、摂津、播磨、備後など、土地が肥沃なところでは綿を栽培して多くの利潤を上げていることを紹介している⁽¹⁵⁾。

江戸中期には、寺島良安が正徳2年(1712年)編纂した『和漢三才図会』巻27「絹布」に「木綿布」の記述が見られる。江戸時代の百科事典とも称される『和漢三才図会』は、それぞれのキーワードに図が添えられ、その物についての説明が加えられている。「木綿布」の項には、反物が描かれ、まだ織っていないものを「木和多」、既に織っているものを「毛女牟」とすること。蚕綿のことを「絹」といい、木綿のことを「毛女牟(もめん)」といい、麻の糸のことは「布」で、3つは別のものであること。また、布の品質は伊勢松坂が上級で、河内、摂津がこれに次ぎ、三河、尾張、紀伊、和泉を中となり、播磨、淡路が下級であることが説明されている⁽¹⁶⁾。またこの『和漢三才図会』には全国の寺社を細かく案内する巻もあり、その75に「河内」がある。その最後には「河内國土産」が掲載されており、^{ヤマモタ}楊梅 石川郡、柿 錦部郡などと並んで、「木綿」(地域なし)の記述がある。ここからも、河内国全域での綿が栽培され木綿が織られていたことがわかる。

江戸後期、享和元年(1801年)に秋里籬島が刊行した『河内名所図会』⁽¹⁷⁾巻5には、大県郡・高安郡・河内郡の名所が図と共に掲載されている。その高安郡のところに見開き全面を使って描かれている図(図4)には、家の中では布を織り、縁側にはそろばんが置かれ、背中に携帯用の天秤を携えた仲買人らしき人物が、家の中に積まれた反物を前に交渉している。店の前で

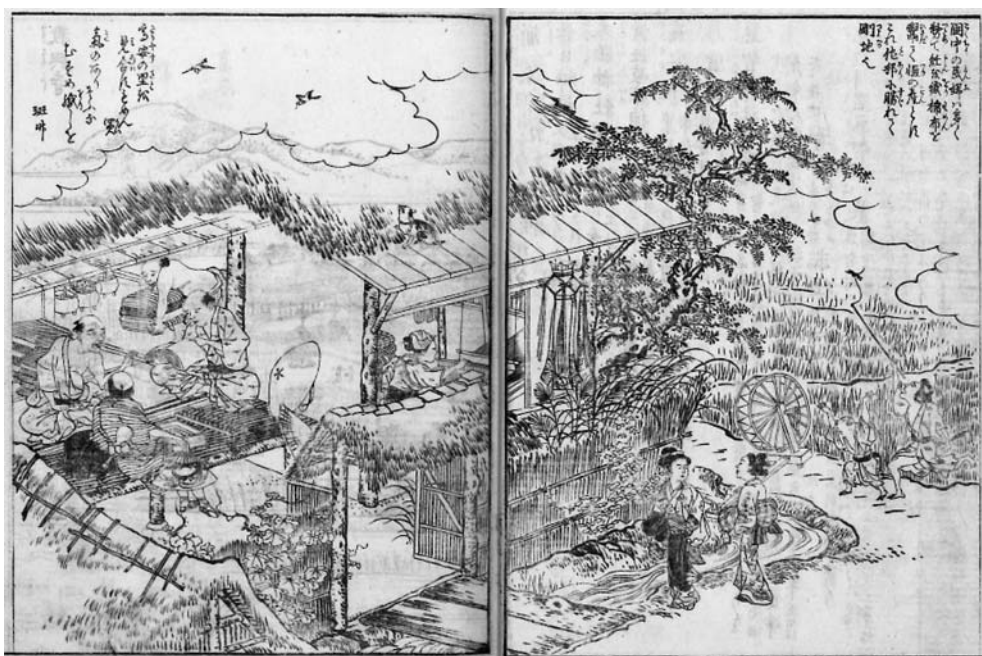


図4 『河内名所図会』 巻5 より高安の里の木綿商いの様子（筆者蔵）

は、大きな糸車をついだ女性が知り合いと談笑している。おそらく自分の糸車持参で糸つむぎの手間賃を稼ぎに来たのであろう。地域の織場兼集積所での商いの様子が生き活きと描かれているこの絵には、「河内国の農民や婦人の多くは糸を紡ぎ、木綿を常に織出している。この木綿は他国と比べて丈夫である。」「高安の里に、時期を見計らって商人達が木綿を買付けに来る。自分に気のありそうな娘の織った木綿を。班竹」という意味の詞書が添えられている。また「名産高安木綿」の項には、「郡内の農民の多くが綿を栽培し、夜は家ごとに老若男女の区別なく糸を紡ぎ、その糸を女性が織ること。この布は他の郡のものより優れており、幅が広く、染めると色がよく、着ると丈夫。これを河内木綿と言う。八尾、久宝寺の商人が村々をまわり木綿を買い付けているのを見て狂歌を詠んだ。もう織れたかと河内に通う木綿商人、待ちかね化粧の匂いのする娘のところに。外村人」という内容の文章が書かれている。この頃には、久宝寺木綿や山根木綿のようなローカルな名称ではなく「これを河内木綿と言う」のように、「河内木綿」が全国的なブランドとして根付いていることがわかる。

天保4年（1833年）には、「2」でも紹介した大蔵永常の『綿圃要務』が刊行される。当時も今も木綿を研究する際には欠かせない『綿圃要務』は、「諸国綿のつくりかたを委くわしく記したる書」であり、詳細な栽培技術を記載し、綿作の中心地であった和泉・大和・河内の近畿や播磨・備中・備後の瀬戸内の綿作の技法についても紹介している。また2巻のうち下之巻の最後「大坂の綿問屋にて 綿の善悪を論ずる事」の項では、大和国、摂津国、河内、山城の綿の特性をあげ、「糸としては河内が最上」と大坂の問屋で言われていることを紹介し、木綿流通の状況

にもふれている⁽¹⁸⁾。

天保13年(1842年)には、同じく大蔵永常による『広益国産考』が刊行されている。この書は、各地の工芸作物を紹介すると共にその栽培奨励し、農家の経営を豊かにすることを目的に作られ、永常の集大成とも言われる。8巻中巻之五に「綿 草綿」「木綿」の項がある。「綿 草綿」の項では、「綿ハ用ひざる国なければ、何れの国にても作るへき物なれ共」とし、大きな儲けが伴い、女子が賃金を得、地方が栄えることにもなることを伝え、栽培を奨励している。「木綿 毛綿」の項では、畑で作る綿は木綿(きわた)、織ったものは木綿(もめん)と読むことを冒頭で説明し、各地で織られる木綿の特徴と用途を紹介している。その最初に「河内木綿ハきれいなれども糸太く地厚きを名物とせり。然れともまた地細にて上品の木綿又縞杯織出す事あれども、地太の丈夫なるを名物とせり。諸国の暖簾湯単ハ河内木綿に限れり。」と河内木綿の特徴をあげている⁽¹⁹⁾。

嘉永6年(1853年)、大坂に30年居住した喜田川守貞が京坂・江戸の風俗を詳細に図説考証してまとめた著した『守貞漫稿』が刊行される。第17編織染の中に「木綿」の項があり、木綿の定義や伝来を含めて、木綿がどのように使われていたかが記されている。その中に「又今世河州を木綿の第一とし又産すること甚多し京坂の綿服には河内もめんを専用とす然どもよりいと細からず染色美ならざるが故に江戸にては不用之」の記述がある。河内木綿の隆盛と合わせてこの書には他にも類似の河内木綿についての記述が散見され、普段着や使用人の衣類として活用されていたことがわかる⁽²⁰⁾。

4. 江戸期の河内木綿と南河内地域

南河内地域、現在の富田林市を含む石川郡・錦部郡の河内木綿の状況はどうであろうか。

その研究対象の多くが中河内である武部善人であるが、『河内木綿史』の中で河内富田林の文禄5年(1596年)の検地帳の「紺屋・さらしや・ぬのや」の記述をあげ注目すべき点としている⁽²¹⁾。

『富田林市史(以下市史と略す)』第2巻には、「第3章 在郷町富田林の発展 第2節 酒造業と木綿商いの展開」として江戸前期の木綿問屋の状況と他国商いの様子が記されている。表は、「表76 商人・職人の概要」⁽²²⁾より、木綿にかかわりの深い晒屋・紺屋・布屋・木綿屋だけを抽出して作成した。この表から、木綿関連商店の分業状態やこれだけの店数を必要とする程、周辺農村から木綿が集まってきたこと、江戸初期には特に紺屋が栄えて木綿の反物を染めて商品化していた様子がうかがえる。その後紺屋の激減は、白木綿が商品の主流を占めるようになったことと関連すると思われる。また、表3の他国商いから、木綿関連商店の多くが近江と取引している。大阪を経由せず近江と直接取引をする姿勢は以後一貫しており、富田林の特徴とも言われる。『市史』第2巻は「当時、木綿商人は、問屋・仲買の区別もなく、自ら買い集めた商品を周囲や遠くに販売していたと考えられるが、富田林村では早くから周辺農村の綿作と結びつき、

表2 木綿に関連する商店の状況

職種	晒屋	紺屋	布屋	機屋	木綿屋
文禄5年(1596年)	1	20	1		
慶長9年(1604年)		15			1
寛永21年(1644年)	1	5			
明暦3年(1657年)	1	3	4		3
寛文8年(1668年)	2	8	4		4
貞享3年(1686年)	1	3	7	1	3
元禄6年(1693年)	1	3	11		3

出典：『富田林市史 第2巻』P.658 表76 商人・職人の概要を元に作成
 (元資料：「畿内在郷町発展の画期について」水本邦彦『史林』56(2), 119-144, 1973-03)

表3 他国商い 貞享3年(1686年)

地名	家持	借家
近江国	12 木綿商(黒山屋)、木綿商(山)、商(布屋)、商(布屋)、商(布屋)、商(布屋)、商(木綿屋)、商(木綿屋)、商(水分屋)、商(古屋敷屋)、商(了意ノ)、商	1 商
紀伊国	10 商(大井屋)、商(大ヶ塚屋)、商(鍛冶)、商(髪結)、商(佐渡屋)、商(佐渡屋)、商(小麦)、商(城口)、商	5 商(紺屋)、商、商、商、小間物商
熊野	6 商(紺屋)、商(晒屋)、商(米屋)、商(山)、商(山か屋)、商(晒明寺屋)	3 商、小間物商、小間物商
江戸	6 商(坂田屋)、商(樽屋)、商、商、商、馬方稼(馬ノ)	
長崎	2 商(布屋)、商	
越前国	2 商(山)、布買(米屋)	
信濃国	1 商(西ノ浦)	
不明		1 商
合計	39	10

注1) () ないは屋号または肩書、数字は延べ数である。

2) 脇田修「在郷町の形成と発展(下)ー河内国石川郡富田林を中心にー」(『ヒストリア』21)。

出典：『富田林市史 第2巻』表77、P.660

その加工・流通の中心地であった。」としている⁽²³⁾。

1973年に東大阪市教育委員会が刊行した『東大阪市文化財調査報告第二冊 河内木綿』の中に、上記の表と呼応する表を見つけた。貞享3年(1686年)の富田林村宗旨御開帳(杉山家文書)を元に作成された表から、各商店の戸主の年齢と共に、実際に近江へ営業に出かけていたのは使用人ではなくその息子達であったことがわかる⁽²⁴⁾。

こうした木綿商店が発展成長し、木綿問屋を形成していく。寛政3年(1791年)「取替証文」(田守家文書)は、2大木綿問屋 黒山屋三郎兵衛(田守家)と布屋武左衛門(倉内家)のうち、布屋武左衛門(倉内家)が佐渡屋徳次郎(仲村家)に問屋株を譲ったことにより、新たに黒山屋三郎兵衛と佐渡屋徳次郎で取り交わした申し合わせ証である。その後、年代は不明であるが3件目の喜志屋藤兵衛(杉本家)が登場する。

表4 富田林より江州へ 貞享3年(1686年)の木綿商い(杉山家文書より)

貞享3年(1686年)	戸主	(年齢)	商用で出国したもの	(年齢)	(戸主との続柄)	行先の注記
毛人	加左衛門	55	亀之助	15	三男	江州へ商ニ参候
布屋	甚左衛門	54	甚四郎	19	次男	江州へ商ニ参候
布屋	清左衛門	58	武左衛門	27	長男	江州へ商ニ参候
			甚五兵衛	25	次男	江州へ商ニ参候
黒山屋	九兵衛	43	三郎兵衛	21	兄弟	江州へ木綿商ニ参候
木綿屋	作左衛門	65	利兵衛	28	長男	江州へ商ニ参候
			権蔵	15	三男	江州へ商ニ参候
布屋清左衛門内分より	作助	26	本人	26		江州へ商ニ参候
水分屋	善兵衛	55	瀬兵衛	23	長男	江州へ商ニ参候
山	七兵衛	47	武兵衛	18	次男	江州へ木綿商ニ参候
古屋敷	忠兵衛	53	本人	53		江州へ商ニ参候

出典：() は筆者が追加

東大阪市教育委員会が刊行した『東大阪市文化財調査報告第二冊 河内木綿』P.26より作成

今井修平の「近世後期河内における木綿流通の展開」『近世大阪地域の史的分析』では、この杉本家の仕切帳を元に、文化から慶応までの木綿販売量を明らかにしている。これを見ると、明らかにその販売量は増加しており、富田林周辺農家の綿栽培と木綿織の状況も想像される。また、この仕切帳が文化6年(1809年)からとなっていることから、少なくとも文化6年(1809年)には、木綿問屋の3件体制が成立していた。

この3件は協力関係を結び、安政7年(1860年)彦根藩主の井伊直弼が暗殺された後、慶応2年(1866年)には、「金100両と白木綿5反を献納し、城下における木綿商いの鑑札を得ることに成功している。」

また、八尾組からの申し入れで、慶応3年(1867年)に河内国全域を対象とする「河内木綿株」設立に向けて動き出した際も、大和川以南の南河内地域を代表して対応にあたっている。『東大阪市文化財調査報告第二冊 河内木綿』は慶応4年(1868



図5 近江への旅装束(田守家蔵)

2018年11月23日田守家公開時撮影

表5 富田林の木綿問屋の変遷

寛政4年(1792年)「取替証文」(田守家文書)		文化6年(1809年)「仕切帳」(杉山家文書)
黒山屋三郎兵衛(田守家)	黒山屋三郎兵衛(田守家)	黒山屋三郎兵衛(田守家)
布屋武左衛門(倉内家)⇒	佐渡屋徳次郎(仲村家)	佐渡屋徳次郎(仲村家)
		喜志屋藤兵衛(杉本家)

参考：『富田林市史 第2巻』P.682-685

年)の杉本藤平の『筆記』をもとに「石川郡、錦織郡、丹南郡、丹北郡、古市郡、志紀郡、安宿部郡、八上郡、の各郡で木綿屋 33 件、またそれ以外に小羅屋が多数いたことがうかがえる。」これらの木綿商は大ケ塚組、喜志組などの組を形成し、「結局、富田林の間屋を中心として 1 つの集荷・流通圏を形成していたことになろう。」としている⁽²⁵⁾。

こうした木綿問屋の発展を支えた周辺農家の状況については、『富田林市紀要 第 3 号 明治元年河内木綿株設立 1 件』にも同じ頃の木綿の作付けが、表 7 のように掲載されている。また『市史』第 2 巻では近世編第 4 章第 2 節においても同じ表をあげて、「元来、田は稲が作付けされるのが原則であるが、有利な商品作物の綿が栽培されることが多かった。新大和川以南の南河内地域は、稲と綿とが隔年交互して栽培される輪作地帯に属していた。」と説明している。

表 6 杉本家(富田林)木綿販売量

元号	西暦	反
文化 6 年	1809 年	11143
文化 11 年	1814 年	13468
文化 13 年	1816 年	16843
文化 14 年	1817 年	14366
文政 3 年	1820 年	17907
文政 4 年	1821 年	16572
文政 6 年	1823 年	19057
文政 8 年	1825 年	21652
文政 10 年	1827 年	24920
文政 11 年	1828 年	23282
文政 12 年	1829 年	25518
天保 3 年	1832 年	23510
天保 5 年	1834 年	26201
天保 10 年	1839 年	17058
天保 12 年	1841 年	24787
天保 13 年	1842 年	22243
天保 15 年	1844 年	27428
弘化 2 年	1845 年	27428
弘化 3 年	1846 年	32080
弘化 4 年	1847 年	30194
嘉永 1 年	1848 年	32421
嘉永 2 年	1849 年	29391
嘉永 3 年	1850 年	24237
嘉永 6 年	1853 年	28364
文久 2 年	1862 年	32275
慶応 2 年	1866 年	32762

出典：今井修平の「近世後期河内における木綿流通の展開」脇田修編著『近世大阪地域の史的分析』1980、御茶ノ水書房、P.277 より

さらに、富田林市 HP では文化財課が、「綿作りの村」として、喜志西遺跡(喜志駅周辺)の発掘の際に搔揚田が見つかったことを、明和 6 年(西暦 1769 年)に書かれた「喜志村様子帳」の綿作りの記録と共に紹介している⁽²⁶⁾。

搔揚田は半田とも言い、『綿圃要務』(図 6)に図が描かれ「河内辺にて、田の土をかきあげて、木綿(わた)をつくり、低き溝へ稲をつくる 是を半田といふ」の添書きがされている。同じ田

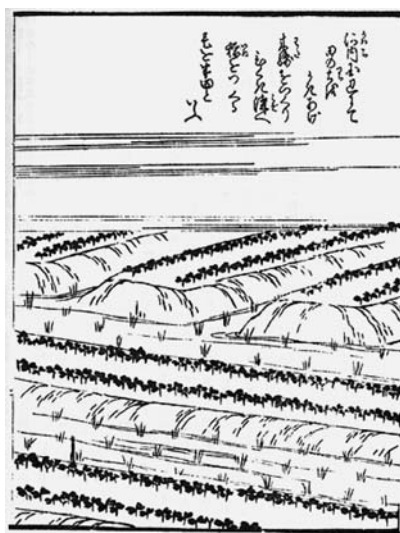


図 6 『綿圃要務』における搔揚田(半田として紹介)の図

盛り上がった畝に綿を、溝に稲を植えている。

出典：大蔵永常『日本農書全集 15 除蝗録 農具便利論 綿圃要務』農山漁村文化協会、1977 年、P.398

表7 村々の収穫状況

明和6年(1769年) 加太新田の作付率 「木綿作斤附立帳」(阪野博氏蔵)

単位畝	田方	%	畑方	%	田畑合計	%
稲作	111.06	100.0			111.06	3.6
木綿作			1703.11	56.8	1703.11	54.8
雑毛作			1296.01	43.2	1296.01	41.6

天明3年(1783年) 甘南備村(幕領)の作付率 「田畑作附帳」(古村恵昭氏蔵)

単位畝	田方	%	畑方	%	田畑合計	%
稲作	1803.12	96.4			1803.12	74.5
木綿作			40.13	7.3	40.13	1.7
雑毛作	67.13	3.6	510.18	92.7	578.01	23.8

天明4年(1784年) 北大伴村の作付率 「諸作植附帳」(西村周夫氏蔵)

単位畝	田方	%	畑方	%	田畑合計	%
稲作	1616.08	63.3			1616.08	53.7
木綿作	721.04	28.2	358.08	78.4	1079.12	35.8
雑毛作	217.17	8.5	98.19	21.6	316.06	10.5

文化元年(1804年) 板持村の作付率 「御田地植付目録」(土井禎昭氏蔵)

単位畝	田方	%	畑方	%	田畑合計	%
稲作	2329.08	50.5	484.21	43.2	2813.29	49.1
木綿作	2141.07	46.5	603.28	53.8	2745.05	47.9
芋作	41.20	0.9	33.06	3.0	172.10	3.0
たばこ作	97.14	2.1				

出典：富田林市『富田林市史』第2巻、1998年、P.704-707 (一部省略)

に、高低差をもうけ、高い方に綿、低い方に稲を植える方法は、稲の収穫増にもつながった。元々多くの肥料を必要とする綿作りであるが、稲と組み合わせて、収量増を実現しているところは、まさに農民の知恵の賜物と言える。喜志でその掻揚田の跡が見つかったことから、富田林地域でも、綿栽培に掻揚田方式が使われていたことがわかる。

続いて『市史』第2巻より、実際の村々では、どの程度綿を栽培していたかを紹介する。表7のとおり4つの村のうち、甘南備村を除く3つの村では、田方・畑方を合わせると綿作が稲作や他の作物と二分する程さかんに行われていた⁽²⁷⁾。

5. 明治期の河内木綿と南河内地域

『農事調査 大阪府之部⁽²⁸⁾ 市郡別(河内国)管内総覧 九 十(第4分冊)』によると、富田林市を形成する石川郡・錦部郡では、表のとおり明治期に入っても続いていることがわかる。特に農人口は多いが農戸数や耕地反数、作付反数の少ない錦部郡では、石川郡(46624貫)よ

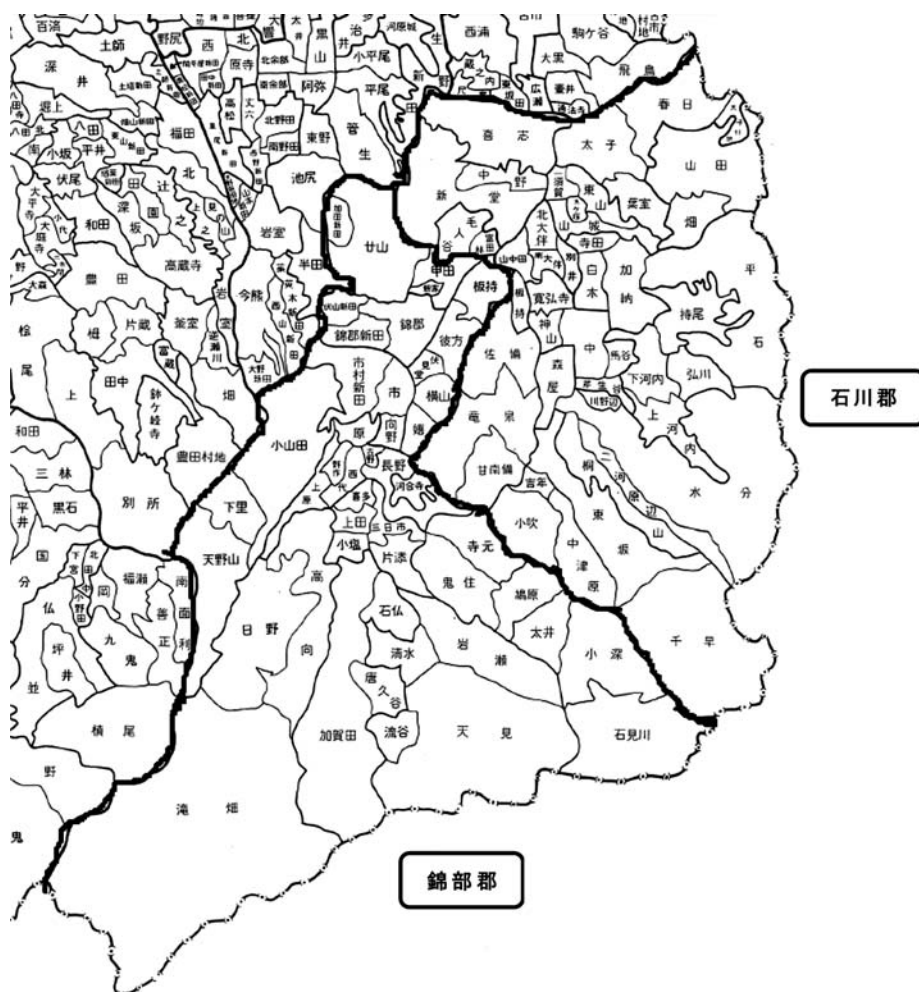


図7 市制町村制施行直前行政区画図より石川郡・錦部郡のみ抜粋 明治22年(1889年)
 出典：大阪府史編集専門委員会『大阪府史 第7巻 近世編Ⅲ』大阪府、1989年

表8 明治中期の石川郡・錦部郡の農業の状況

	石川郡	錦部郡	大阪府
農戸数	4555 戸	3385 戸	107144 戸
農人口	9013 人	11644 人	383260 人
耕地反別	2070 町 3 反歩	2042 町 5 反歩	71423 町
作付反別	3714 町歩	3305 町 9 反歩	117142 町 8 反歩
農産収入総額	275463 円	256469 円	8254577 円
農家負担総額	49337 円	43643 円	1616520 円
耕地地租	36011 円	32574 円	1230484 円
耕地に係る地方税	6194 円	5603 円	211673 円
耕地に係る市町村費	6304 円	4717 円	146045 円

公儲金（儲：たくわえ）	828 円	749 円	28300 円
収入負担差引残額	226126 円	212826 円	6638075 円
農家負債総額	46613 円	63697 円	2581583 円
農家貯蓄	1346 円	11158 円	109753 円
粳米（うるちまい）	32494 石	27653 石	877031 円
糯米（もちごめ）	1787 石	1536 石	36549 円
綿	46624 貫	73377 貫	3060514 貫
柿	14189 貫	72594 貫	355473 貫
木綿織及紡ぎ 女	7451 人	4729 人	
木綿織及紡ぎ 1 年の収入	2534 円	1385 円	

出典：『農事調査 大阪府之部 市郡別（河内国）管内総覧 九 十（第 4 分冊）』[1890 年] 石川郡 P.1-12、錦部郡 P.48-60

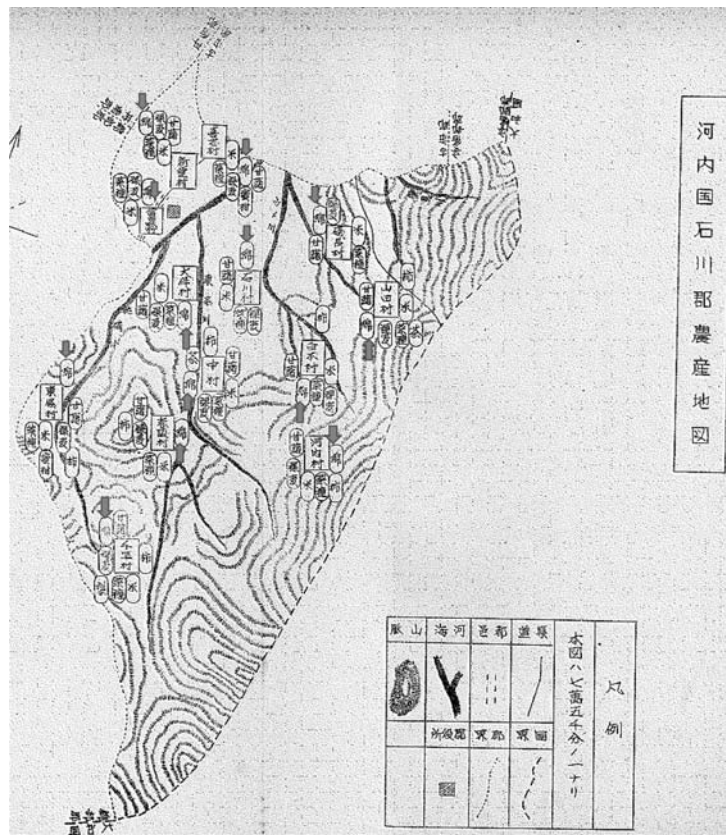


図 8 明治中期の河内国石川郡農産地図（筆者が「綿」に ↓ を追加して強調した）

出典：『農事調査 大阪府之部 市郡別（河内国）管内総覧 九 十（第 4 分冊）』[1890 年] 石川郡 P.1-12

(44)

りはるかに多い 73377 貫もの綿が収穫されている。この錦部郡の項には「本郡の余業木綿織はおもに白木綿にしてしま木綿を織るものは甚だ稀なり、而して現時価格の低落にも関わらず、その販路は依然旧時に異ならざるをもって辛うじて、その業を営むことを得。」の記述がある。明治期には、中国（上海、安南、暹羅）方面から国産の 25 倍にもものぼる綿が輸入されており、江戸時代には米の 2 倍とも言われた綿の価格は急落する。そうした中でも、この地の主流は白木綿であり、綿の値段が低迷してこれまでと変わらない木綿取引が行われていたことを伝えている。

また大阪府全体の記述では「綿もまた仲買人若しくは紡績会社員、産地に来たり農家に就いて之を買い取り又は農家自ら市場又は紡績所に輸送し、時価をもって売却す。もっとも富裕の農家は 2・3 年もこれを貯蔵しよろしき価格高貴（値段が高いこと）の時機に〇し売却するものあり。」とあり、綿の値段低下に、富裕な農家は、貯蔵することで出荷調整していたことがわかる⁽²⁹⁾。

図 8 と図 9 は、「河内木綿と寺内町展」で、来館者から多く問われた「綿はどこらへんで作っていたんですか？」への答えになる。綿作りが衰退する直前の明治時代の状況を見ると、石川郡では全域が綿を生産している。錦部郡では、長野村と三日市村を除く村々で綿が生産されている。

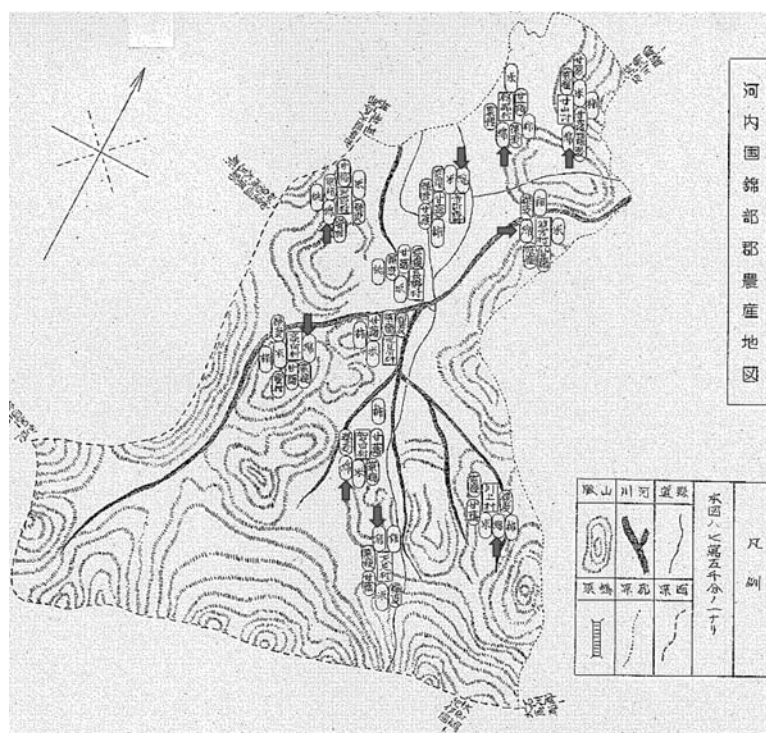


図 9 明治中期の河内国錦部郡農産地図

出典：『農事調査 大阪府之部 市郡別（河内国）管内総覧 九 十（第 4 分冊）』
[1890 年] 錦部郡 P.48-60

また、明治から昭和（戦前）までの南河内地域の綿栽培の状況は、『大阪府統計書』⁽³⁰⁾で追うことができる。

表9は、市制町村制施行前の石川郡と錦部郡の綿作りの状況を表し、それを元に作成したグラフは、明治16年（1883年）から明治17年（1884年）にかけての収穫量の急減を表している。この時期について、『市史』第3巻は、河内木綿の不振の原因を「粗製濫造、尺幅の低下」⁽³¹⁾としている。

表9 明治22年（1889年）の市制町村制実施までの石川郡と錦部郡の綿の収穫状況

元号	西暦	石川郡		錦部郡		大阪府全体	
		反別（町）	収穫（貫）	反別（町）	収穫（貫）	反別（町）	収穫（貫）
明治15年	1882	綿の記載なし					
明治16年	1883	26845	648.55	88529	558.54	3753415.0	18240.43
明治17年	1884	13221	101.15	18722	124.36	2724090.0	12786.56
明治18年	1885	綿の記載なし					
明治19年	1886	19831	63.00	39928	131.30	3146671.9	11091.26
明治20年	1887	33768	100.80	59200	185.00	12181156.0	10757.80
明治21年	1888	46624	245.70	73377	236.70	3060514.0	11210.80
明治22年	1889	63882	245.70	50000	200.00	2010431.0	10005.28
明治23年	1890	44823	245.90	52000	200.00	3249749.0	9655.00
明治24年	1891	65780	253.00	55000	220.00	3204193.0	8985.60
明治25年	1892	15522	59.70	27975	111.90	2180976.0	7654.40
明治26年	1893	15400	61.80	28150	112.60	1988149.0	7037.70
明治27年	1894	10757	34.20	22059	68.40	2281237.0	6478.70
明治28年	1895	16211	51.50	21234	54.20	1688571.0	5117.70

出典：『大阪府統計書』各年度分

明治中期の綿の収穫状況（貫）

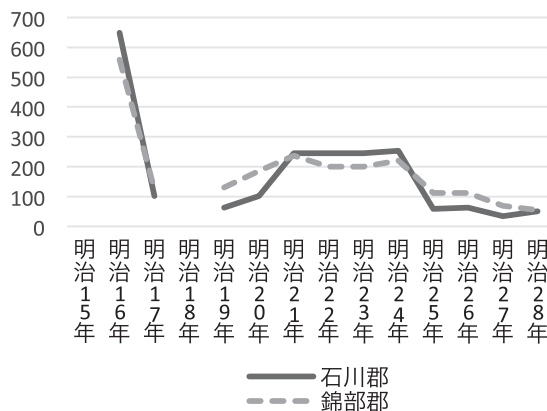


図10 明治中期の石川郡・錦部郡の綿の収穫状況の変化（表9を元にグラフ化）

表 10 市制町制実施以降の南河内郡と中河内郡のまでの収穫状況の変化

		南河内郡		中河内郡		大阪府全体	
元号	西暦	反別 (町)	収穫 (貫)	反別 (町)	収穫 (貫)	反別 (町)	収穫 (貫)
明治 29 年	1896	107911	358.00	613619	3515.90	987325.0	6351.10
明治 30 年	1897	99162	314.80	373084	1556.90	862692.0	3903.90
明治 31 年	1898	92246	282.10	802720	1583.80	1339349.0	3438.10
明治 32 年	1899	92428	278.40	665712	964.80	928968.0	2071.70
明治 33 年	1900	31146	109.10	396771	1482.40	629804.0	2341.70
明治 34 年	1901	25466	83.10	512668	1490.80	686729.0	2113.40
明治 35 年	1902	18690	79.00	355998	1666.30	508615.0	2205.10
明治 36 年	1903	15352	65.10	422326	1562.20	522232.0	1927.40
明治 37 年	1904	33682	55.00	281693	1391.30	364246.0	1657.6
明治 38 年	1905	8175	43.20	259923	1207.00	295201.0	1356.3
明治 39 年	1906	5022	23.20	290999	1005.3	284142.0	1122.80
明治 40 年	1907	4074	16.70	176933	689.90	199667.0	781.30
明治 41 年	1908	2274	9.30	77038	288.10	96771.0	359.20
明治 42 年	1909	944	2.70	44404	164.20	58443.0	208.20
明治 43 年	1910	1040	2.80	45180	151.30	51697.0	170.60
明治 44 年	1911	1020	2.30	33092	103.80	36575.0	115.40
明治 45 年	1912	91	0.30	43878	117.80	47711.0	127.70
大正 2	1913	0	0.00	36900	105.10	39902.0	112.90
大正 3	1914	0	0.00	26980	69.40	28487.0	74.60
大正 4	1915	0	0.00	23228	58.60	25020.0	64.40
大正 5	1916	0	0.00	19844	48.40	21180.0	53.00
大正 6	1917	0	0.00	19513	51.50	20699.0	55.60
大正 7	1918	0	0.00	14032	46.20	15461.0	50.70
大正 8	1919	0	0.00	15168	31.60	16568.0	42.60
大正 9	1920	0	0.00	22368	46.60	26128.0	48.60
大正 10	1921	0	0.00	8640	21.60	12885.0	32.60
大正 11	1922	120	0.30	1624	4.90	2254.0	6.30
大正 12	1923	0	0.00	1106	2.90	1474.0	4.40
大正 13	1924	0	0.00	534	1.80	688.0	2.50
大正 14	1925	0	0.00	94	0.30	178.0	0.70
大正 15	1926	0	0.00	0	0.00	50.0	0.30
昭和 2	1927	0	0.00	210	0.60	240.0	0.80
昭和 3	1928	0	0.00	140	0.40	155.0	0.50
昭和 4	1929	0	0.00	69	0.30	84.0	0.40
昭和 5	1930	0	0.00	44	0.20	761.0	2.10
昭和 6	1931	0	0.00	42	0.20	267.0	1.00
昭和 7	1932	0	0.00	46	0.20	307.0	1.10
昭和 8	1933	0	0.00	123	0.40	498.0	1.70
昭和 9	1934	0	0.00	78	0.30	408.0	1.50
昭和 10	1935	0	0.00	88	0.30	388.0	1.30
昭和 11	1936	0	0.00	30	0.10	300.0	1.00
昭和 12	1937	0	0.00	0	0.00	435.0	1.60
昭和 13	1938	0	13.00	0	0.00	286.0	1.10
昭和 14	1939	992	4.40	40	1.00	3872.0	15.70
昭和 15	1940	1088	6.50	89	0.20	4757.0	21.10

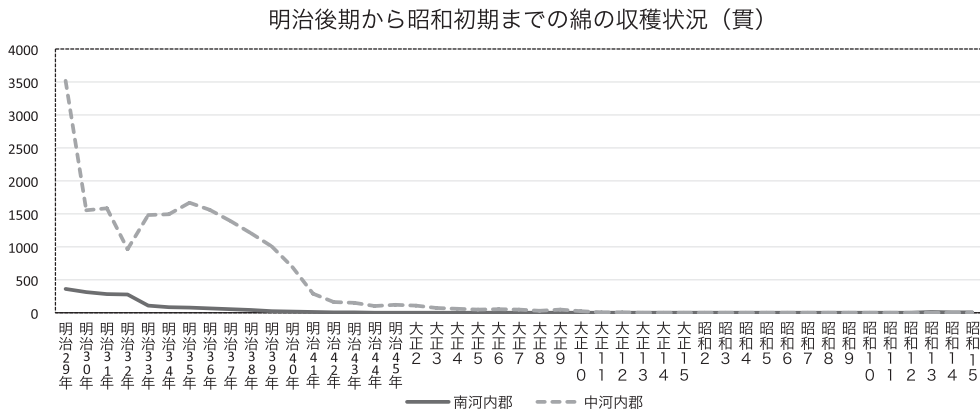


図 11 市制町制実施以降の南河内郡と中河内郡のまでの収穫状況の変化（表 10 を元にグラフ化）

大量に輸入される安価な外国産綿は、繊維が長く機械化に向いていたが、国産綿は繊維が短く機械にはかけられなかった。景気が低迷する中、綿の値段は下がり、手工業としての製品の質が落ちた結果、「河内木綿」は評価を下げる。この状況を改善しようと富田林の木綿商仲間が奔走するが、この流れを止められず南河内の「河内木綿」は衰退していく。

表 10 は市制町制実施以降、明治から昭和始めまでの南河内郡と中河内郡のまでの収穫状況の変化を示す。南河内郡だけでなく、中河内郡とも比較した。中河内郡では、南河内郡が早くに低迷状態に入った後も、旧河内国内で最も綿の収穫量の大きな中河内郡は綿作を続けている。綿作りは、南河内郡では明治 45 年（1912 年）頃に、中河内郡では大正 15 年（1926 年）頃に終焉を迎える。

国の国内綿栽培保護の姿勢は、外国産綿種の栽培奨励などに見られるが、結局はうまくいかず、明治 29 年（1896 年）「輸入棉花及羊毛海関税免除法」を公布し、紡績の機械化奨励に舵を切る。こうした状況の中でも、中河内郡では大正期まで綿作りが続けられていた。武部はその理由を「棉作、綿業に代わる換金作物も見当たらず、また紡織に代わる余業もなく」としている⁽³²⁾。中河内郡は、宝永 2 年（1705 年）の大和川付け替え以後、新田開発に努め綿畑を増大させ綿の一大産地として隆盛を究めたが、その分綿からの転換に遅れた。しかし南河内郡は、図 10・11 に見られる多彩な農作状況を持っていたことで、早い段階に綿作りを、現在のような米やその他の近郊野菜栽培へ転換できていたことが想定される。

おわりに

地元の方から、古老の「大学の後ろにある丘から里を見下ろすと、一面の綿畑が広がっていた。」という言葉を伝え聞いた時、その方の年齢から昭和初期を想定していた。しかし、残念ながらその頃には「一面の綿畑」は存在しないので、おそらくその古老も伝え聞きであったのであろう。

確かにこの地には、綿が栽培され、農家の特に女性の貴重な換金手段として木綿が織られ、富田林寺内町の木綿問屋の手を借り、全国に「河内木綿」として広がっていった歴史がある。それにも関わらず、この地では、そのことは忘れられかけている。

筆者が「河内木綿と寺内町展」の準備のため、富田林の木綿栽培の歴史やこの地で作られた河内木綿の現物を収集した際も、思うように入手できなかった。逆に、旧家の解体や引っ越しの際に粗大ごみとして捨てられてしまう状況を何度も耳にしたことで、非常な危機感を持つにいたった。富田林の宝である河内木綿をこれ以上失わないために、河内木綿のことを知ってもらいたいという強い思いで、「河内木綿と寺内町展」に携わった。

そのプロセスで、何度も八尾市の状況が頭をよぎった。八尾市は歴史民俗資料館を持ち、学芸員を配置して、河内木綿についても積極的な資料の収集・展示・研究成果の発信を行っている。その活動は市民に周知され、市内の河内木綿関連の資料の散逸を防止し、市民に活用され、河内木綿の保存会や工房などの市民グループが生まれるといった好循環を創造している。

こうした結果、実際に今回の「河内木綿と寺内町展」の来館者からも「河内木綿は八尾のものだと思っていた」との声が何度も聞かれる程、八尾市の河内木綿の活用は、八尾市の特色や魅力発信につながっている。

筆者は現在、大学のある錦織地域の方々の歴史研究会に所属しており、間もなくその成果が3冊目の冊子となって発行される。自分の生まれた町を愛し、深く知ろうとされている市民は少なくない。「河内木綿と寺内町展」でも、今回の展示資料に関連する文献を富田林市立図書館からの提供分と今回収集した分を合わせて実際に手に取ってもらえるよう配置したが、何人もの方が手に取り、座り込んで文献と向き合っておられた。生涯学習の面からも、市民の学びを継続的に支援し循環させる機関がこの地に生まれることを願う。

最後になりましたが、今回の展示を通して、観光交流施設きらめきファクトリー館長赤崎浩樹様はじめたくさんの方々の関係者の皆さまから、貴重なご示唆・ご支援をいただきました。心より御礼申し上げます。

注

- (1) 武部善人『河内木綿史』吉川弘文館、1981年、P.7、L.3
- (2) 黒板勝美・国史大系編修会『類聚国史』吉川弘文館、1981、P.377、L.4-11（国立国会図書館デジタルアーカイブあり）
- (3) 松尾量子「木綿織物の受容過程と柳井稿に関する一考察」『山口県立大学生生活科学部研究報告』31、21-27、2006、P.22、L.2-7
- (4) 田中健夫『善隣国宝記新訂続善隣国宝記』集英社、1995、P.121
東京帝国大学文学部史料編纂所編纂『大日本史料第7編之8』東京大学出版会、1940年、P.329、L.1-5
- (5) 小野晃嗣「本邦木綿機業成立の過程」『日本産業発達史の研究』法政大学出版、1981年、P.243、L.11-18
- (6) 竹内理三編『増補続史料大成 大乘院寺社雑事記四』臨川書店、1978年、P.221-222
- (7) 武部善人『河内木綿史』吉川弘文館、1981年、P.3、L.7-10

- (8) 永原慶二『新・木綿以前のこと』中央公論、1990年、P.72-73
- (9) 小野晃嗣「本邦木綿機業成立の過程」『日本産業発達史の研究』法政大学出版、1981年、P.266、L.6-9
高橋義彦『越佐史料。』巻3、三秀舎、1927年、P.379-380、毛利文書 上杉家記 十二 所収
- (10) 大蔵永常『日本農書全集 15 除蝗録 農具便利論 綿圃要務』農山漁村文化協会、1977年、P.331、L.9-14
- (11) 武部善人『河内木綿史』吉川弘文館、1981年、序 P.1、L.6-11
- (12) 武部善人『河内木綿史』吉川弘文館、1981年、P.8-9
- (13) 松江重頼『初印本 毛吹草 影印篇』ゆまに書房、1978年、P.145-146「河内」
- (14) 貝原益軒『帝国文庫 第22篇 紀行文集』（南遊紀行所収）博文館、1930年、P.159、L.17、P.160、L.1
- (15) 宮崎安貞『日本農書全集 13 農業全書』農山漁村文化協会、1978年、P.6-7
- (16) 寺島良安『和漢三才図会』巻二十七・巻七十五「絹布」正徳2年（1712年）
- (17) 秋里籬島『河内名所図会』巻五、享和元年（1801年）
- (18) 大蔵永常『日本農書全集 15 除蝗録 農具便利論 綿圃要務』農山漁村文化協会、1977年、P.409、L.2-6
- (19) 大蔵永常『日本農書全集 14 広益国産考』農山漁村文化協会、1978年、P.245-251
- (20) 喜田川守貞『類聚近世風俗志：原名守貞漫稿 再版』文潮社書院、1929年、P.22
- (21) 武部善人『河内木綿史』吉川弘文館、1981年、P.54、L.12-13
- (22) 富田林市『富田林市史』第2巻、1998年、P.658
- (23) 富田林市『富田林市史』第2巻、1998年、P.682、L.9-10
- (24) 東大阪市教育委員会『東大阪市文化財調査報告第二冊 河内木綿』1976年、P.26
- (25) 東大阪市教育委員会『東大阪市文化財調査報告第二冊 河内木綿』1976年、P.28-29
- (26) 富田林市 HP <https://www.city.tondabayashi.lg.jp/site/bunkazai/2615.html>（2018年11月30日取得）
- (27) 富田林市『富田林市史』第2巻、1998年、P.706-707
- (28) 『農事調査 大阪府之部』（全4冊）、[1890年]（著者、出版社情報の記載なし、明治22年（1889年）の調査結果等掲載。当時の農商務省が国内の農業状況把握のため、各府県庁に対し調査報告を求めたことにより作成。）大阪歴史学会騰写複製版、1956年。
- (29) 『農事調査 大阪府之部 調査主眼 現況（第1分冊）』[1890年] 大阪歴史学会騰写複製版、1956年、P.20、L.7-9
- (30) 『大阪府統計書』は、現在の『大阪府統計年鑑』の前身。明治14年（1881年）の分から見ることができる。ただし、ネットで公開されている分には欠けている年度があり、その分は大阪府統計資料室で閲覧・追加した。大阪府 HP→大阪府統計年鑑 <http://www.pref.osaka.lg.jp/toukei/nenkan/index.html>（2018年11月30日取得）
- (31) 富田林市『富田林市史』第2巻、2004年、P.75
- (32) 武部善人「近郊農業の展開：河内木綿の崩壊と近郊農業の成立」『大阪府立大学経済研究』1957、P.40、L.2